

---

# 魂は本来還るべき場所へと去る

彼方 ヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魂は本来還るべき場所へと去る

### 【Nコード】

N8825M

### 【作者名】

彼方 ヒロ

### 【あらすじ】

交通事故で命を落としてしまった僕は、謎の異世界に迷い込み、一人の少女と出会う。

## 1 (前書き)

短編を書いてみました。

テンポ的にどうかかなーと思う作品ですが、どうか読んでってください。

土砂降りの雨が降る夜、僕はひたすら走っていた。すでにパンツまでびしょ濡れで、イチモツがぺちやぺちやいって気持ち悪い。

耳に残響する雨音が、僕の聴覚を狂わせている。だから、その時背後から近づいてくるエンジン音に、僕は気づいていなかった。突然背後から光が差し込んできて、振り返る。既に車は目前に迫っ

ついで。その瞬間、腹に鈍い衝撃を感じ、体が宙に浮いた。

\*

そして、少年は確かに死に、現世からその魂は離脱する。しかし、何の因果か、少年の魂は本来帰るべき世界へと向かわず、その岐路にある異世界へと迷い込んでしまった。

そこは万人の願いを叶える場所であり、それぞれの願いが複雑に絡み合い、具現化された楽園だった。

少年はそこで何を見て、何を想うのか。

その世界の行く末は少年の手に握られている。

それは、ほんの一時の夢。ああ、よき夢を。

\*

頭に痛みが走り、唐突に目が覚めた。

おでこに、固いものが押し付けられている。痛いつ、痛いつつうの！

体を起こそうとするが、おでこに加えられた力が存外に強く、起き上がれない。

一体、何が乗っているんだ？  
目を開くと、眼前に白が広がった。

これって……パンツ、だよな。

うん、きつとそうだ。そして、この肌色の部分が足で……つまり、僕は真下から、誰かのスカートの中をのぞいているのか。

現実が信じられずに唾然としてみると、ぐりぐりっと固いものを一層押し付けられて、僕は悲鳴を上げた。

「ほう。ようやく起きたようだね」

頭上から女の声が降ってくる。ベテランのオペラ歌手のようなやたらと高い声だった。

僕はそれをおでこから引き剥がそうとした。この形状からすると、これは靴だろう。間違いない靴だろう。

誰かが僕の頭を踏みつけているのだ。一体どこの馬鹿だつ、ただじゃすませない！

「あんまり暴れるものじゃない。いつまで待っても起きないから、仕方なく頭を踏んだのだよ。足の裏とかお腹とかお尻とかを踏みつけて試してみたが、一番これが効果的だよだね」

尻が痛いのは、やっぱりお前の仕業だったのか！

少女がようやく靴をどけ、僕は飛び起きる。目の前に立っていたのは、どこぞの悪役が着ていそうな黒いマントで全身を覆った、少女だった。少しやせ気味に感じられるほっそりとした体をしている。フードを目深に被っているので、顔はよく見えない。どこの仮装マニアだ？

「なんだね、その訝しげな目は。ぼくを変質者のように見て」

「そのままだろ！」

すると、少女は唇を三日月型に吊り上げた。この野郎、笑いやがったな。

「君は普段おとなしいクセに、キレると人が変わって暴力的になる、典型的な例だね。もっとカルシウムを取りたまえ。自信はないが、僕の胸にしゃぶりつくかい？」

「黙れっ！」

すると、少女は唇をすばめて、拗ねた様子になる。

「もつと言葉は選びたまえよ。君は今、ぼくがいないと何もできないただの幼子なのだからね。状況を理解したまえ」

「状況？」

「言葉で表さなければ理解できないのかい？ 日本人は無言の中から相手の意を汲み取るのが長けているというが、あれは嘘だったのか？ …… 周りを見たまえ」

僕は少女に言われるままに、周囲を見渡す。そして、その瞬間、目を見張った。どこだ、ここ？

レンガが敷き詰められた坂道の上に僕らはいた。等間隔に、外灯が立ち並んで、薄暗い光を落としている。さらに、僕らは、見たことのない家々によって周囲を取り囲まれていた。正方形で薄い形をしている建物だ。使っているのはレンガで、色は暖色だ。

くすくすと笑い声が聞こえてきたので、僕は我に返った。振り返ると、少女が腹を抱えて笑っている。

「君の顔といたら…… 本当に無様なことこの上ない。そんな捨てられた子猫のような瞳で見ないでくれたまえ。ママのお乳がそんなに恋しいかい？」

僕は怒鳴り返そうとして、口をつぐんだ。その時は、怒鳴り返すだけの元気もなかった。そのまま見捨てられて、未踏の地に放り出されるのがたまらなく怖かった。

「ほら、そこが君の弱いところだ。ここで怒鳴り返さなくて、どうするんだい？ そのくらい度の胸もなく、よく生きてこれたものだね。生きることというのは、いつも勇気と隣合わせだというのに」

レンガだらけの町並みは、無機質で、背筋を氷で包み込んでくるような寒々しい印象を僕に与えるだけだった。僕は孤独感に涙が溢れそうになる。

一体、ここはどこなんだ。どうして、僕がこんなところにいるの？ そう考えた瞬間、ある光景が蘇った。薄暗い外灯が照らす夜の道

路。背後から迫るヘッドライト。腹を突き抜ける衝撃。

そうだ。僕は 死んだはずじゃないか。

大きな震えが身体中を駆け回った。嘔吐感に、僕は口を抑える。その時、すっと細い手が伸びてきて、僕の頬を両側から挟み込んだ。

顔を上げると、すぐ間近に少女の顔がある。外灯の光が、フードの中を浮き上がらせた。

大きな鳶色の瞳。細長く伸びた鼻。きめ細かな薄い唇。絵本の中から飛び出してきたような美しい少女だった。

僕は彼女の表情に目を釘付けにする。

笑っていた。

その笑顔は、相手のすべてを包み込み、溶かしてしまうような慈しみに溢れている。

少女を見るうちに、恐怖に絡め取られていた僕の心は、温かみを取り戻していった。

「死んだ時のことは思い出さなくていい。過去の記憶など、何の役にも立たないのだから。それと、ぼくがいるから、大丈夫だ。何も見えない闇の中で、ぼくの知識は足元を照らすほのかな明りとなるだろう」

「ここは、どこ……?」

少女はゆっくりと、手を空に翳し、頭上を仰いだ。夜なのだけけれど、眩しそうに目を細める。

「どこなのかなんて、ぼくにはわからない。ただ、悪い場所でないのは確かだ」

「君はどのくらいここにいるの?」

彼女は指の間から空をのぞきこみながら、「さあてな」と言う。

「一体どのくらいの間、ここにいたのか、ぼくにもわからない。けれど、君が生きていた時間よりずっと長いことは確かだ」

そこでようやく少女の手が下ろされ、彼女は僕をまっすぐ見据えた。通りすがりの友人に握手を求めるような感じで手を差し出して

くる。

「さあ、行こう」

僕はその手を見たまま固まった。

「一体どこに行くんだよ」

「ただひたすらに歌って踊りに行くのさ。どの道ここにいたって仕方ないだろう？ それともなんだ、この坂道で寝転がって眠るとでも言うのかい？ 付き合いきれないな。ぼくは暖かく柔らかいベッドの上でしか眠れないんだ」

「誰がそんなこと言ったよ！」

僕は叫びながら、少女の腕を荒っぽく掴む。本当は手を握るのが恥ずかしかつたのだ。

「本当に素直じゃない子だね。とことん奥手なものいいが、それではいつまでも童貞のままだよ？ 相手がいないのなら、ぼくが体を貸した方がいいかい？」

「余計なお世話だ！」

少女に見透かされているのが余計に恥ずかしくて、僕はそっぽを向きながら歩き出す。けれど、内心では、少女の手の温かみに、心底ほっとしていた。

\*

坂道を抜けると、森に着く。背の高い木々が、空を覆い隠している、僕らの影は夜の闇に呑み込まれてしまっていた。

少女がそのまま中に入っていこうとするので、僕はたまらず、「ちょっと待って！」と叫んだ。

彼女は眉をひそめながら振り返る。

「なんだね。ここなら暗くて人目につかないから、一発やろうとでも言うのかい？」

「誰がそんなことのためうか！」

「じゃあ、何の用件だね？ はっきり言いたまえ」



「こんな真つ暗な中を進むのかよ！」

少女は冷たく睨んでくる。

「もはや言葉にするのがはばかられるほど、君の度胸は小さいね。鼻くそほどもない。それでも一物については知っているのかい？」

「だって、危ないじゃないか！」

僕は間違つてないよな？ そうだよな？

「はいはい、わかったよ。ちょっと待ちたまえ」

少女はマントの中に手を入れ、ごそごそやった後、ひよいと一つのランプを取り出した。え？ 意味わかんない。どこにそんなもの入れるスペースがあるの？

少女は僕の視線がうざったそうに顔をしかめ、マッチでランプへ点火する。

「何かあると、いちいち説明を求めるその癖、どうにもできないのかね？ 感情より頭が先に動くということは、まことにいただけない。そんなことでは、ロマンチックな余韻に浸ることもできやしない。味気ない人生を送ることになるだろう」

セリフの意味不明さに拍車がかかってきてる。誰か翻訳してくれ。「どうせ、内心でぼくのことをけなしているのだろう？ いいだろう。存分にけなしたまえ。想像の中だけでもいいから、度胸を持つてみる事だな。今の君は、本番直前に一物が勃たなくて焦る不感症の男子に似ている」

「不感症とか、何失礼なこと言つてんだよ！ とつとと行くぞ！」

僕は少女の手からランプを奪い取り、歩き出す。

「やれやれ。言葉のやり取りこそ最高の悦楽だということが、いまだに認識できないようでは、話にもならない」

少女は、どこか拗ねたように唇を尖らせながら、僕の手を握つて、後に続いた。

しばらく歩いてみると、「なあ」と突然呼びかけられて、僕はびっくりして、振り向く。そして、西洋人形めいた少女の顔が驚くほど間近にあることに気付き、もう一度驚く。

「君のことを話してくれ」

突然の言葉に、僕は面食らった。

「な、なんでそんなこと頼むの？」

僕の声は異性の裸を見たときのようにみっともなく裏返っている。少女は目を逸らして、唇を尖らせた。

「何、情報収集だよ」

見栄だとすぐに気付いた。素直じゃないのは自分だってそうじゃないか。

そう思ったけれど、僕は言葉にはせず、「わかったよ」とうなずいた。

彼女が、僕に興味を持ってくれたことがたまらなく嬉しかったから。

ぼつりぼつりと自分について話し始める。

塾に通っていたこと。勉強が得意だったこと。その他、初めて好きになった女の子の話など、口から滑り出るように言葉が零れ出た。どうして、こんなに素直に自分のことを話せるのか、不思議だった。

あるいは、少女が聞き上手だったからかもしれない。

「ふむ」「そうか」「それで？」とぶつ切りの言葉をつぶやくだけで、特に何のリアクションもしないけれど、その静かな瞳でじつと見つめられると、言葉が引つ張り出されるように次々と出てくる。少女との会話は不思議な温かみに満ちていた。

「それで、さやかちゃんに告白してみたんだけど、どういう訳か告白の現場で逃げられちゃったんだ」

「ふむ、なるほどな」

少女はどこか思案げな表情を浮べて、顎に手を当てる。

「君という奴は、女心がわからない奴だな。何故逃げたのか、本当に理解しなかったのかい？」

「どうしてなの？」

僕はきよんとする。

「それは、君に告白されて嬉しかったからに決まってるだろう。あまりに気持ちが高揚して、顔を見ていられなかったんだ。もう一度挑戦してきたら、その時にちゃんと返事をするつもりだったのだからよ。」

「えっ、うそっ。だって……」

「どうせフラしたと思ってさやかに近づくことをやめたのだろう？ 彼女がどれほど寂しい思いをしたのかわからなかったのかい？」

「そんなあ！ 僕って、真性の馬鹿だっ！」

「殴ってください！」

僕は自分の顔を少女に差し出す。

「いいだろう」

少女は大きくうなずき、思いつきり僕を殴り飛ばした。僕は地面に転げ、口の中に血の味が広がる。

「ひどっ！ そこでグーで殴るか、普通！？」

「君がやってくれと言っただろう？ ぼくはさやかかの代理として殴っただけだ。むしろ感謝されるべきだ」

「チビの癖に腕力だけありやがって……！」

少女はむ、と口を引き結んだ。

「身長の高さがデメリットだと、誰が言ったんだい？ 世の中には背が小さくて得する事もあるのだよ？ 階段を上っている時、前を歩く美人のミニスカートの中が見えたりね」

「小柄な体を変なことに利用すんな！」

言い合っているうちに、前方にほのかな明りが見えてきた。絵の具の染みのような光。

「着いたようだね」と、少女はどこか嬉しそうに言った。

ほどなくして、大きな広場に着く。噴水から水が勢い良く出て、掘り出したばかりの砂金のように煌めいている。そのすぐ手前では、楽団が演奏をされていて、タンバリンやフルート、アコーディオンなど、様々な楽器がある。

その前で、老若男女が踊っていた。

僕は面食らっていたのも束の間、すぐにその賑やかな雰囲気が心地良くなる。フルートの済んだ高い声が、アコーデオンの起伏を描いた音色が、タンバリンの軽快なリズムが、耳に心地良い。

「さて、ぼくも踊ろう」

少女がフードを下ろし、金色の髪をあらわにした。彼女は首を振ってそれを払うと、僕の手を引いて、人々の中に入ろうとする。僕は「ちよつと待って！」と叫んだ。

「この機に及んでまだ不満があるのかい？ 君はさぞかし両親に甘やかされて育つたのだろう？ だからこんなちんけで度胸のないなよなよした男になってしまったのだよ」

こいつ、本当に口の減らない奴だな。出会ってからずっと僕のと罵倒しやがって！

「僕、踊れないんだよ……」

少女はあからさまに嫌そうな、めんどくさそうな顔を浮かべ、

「なんだね、君は。雌に色目でも使う気かね。世間体を気にしている暇があったら、もっと己の愚昧さを嘆くべきだ。踊りなど適当でいいんだ。乙女にここまで言わせて、恥ずかしくはないのかい？」

あまりにも痛烈にけなすので、少し落ち込んでしまう。ちえつ、そこまで言うことないじゃないか。

「己の愚昧さを理解したかい？ ほら、さっさと行こう」

少女に腕を引かれて、僕は人々の間を縫うように歩く。彼女は噴水の前まで来ると、くるりと振り向いて、僕の両手を握った。噴水の飛沫が、少女の金髪を琥珀のように輝かせる。

「ぼくを楽しませてくれたまえ」

少女は、くるくる回り始めた。「うわっ」と情けない声を上げる、僕。

「ステップを踏むよ。ぼくに合わせたまえ」

そう言って、少女は足を踏み出す。必死になってそれに合わせる僕。そのまま前後左右に動く。

少女のステップに合わせるので精一杯で、終始もたもたした動き

だつたけれど、時間が経つうちにだんだんと慣れてきた。

「ふむ、なかなか様になつてきたじゃないか。どうだい、楽しいかい？」

僕はわずかに顔をうなずかせる。正直楽しくて仕方がなかったのだけれど、素直に言つたらまたからかわれそうだから。

「なにかね、ぼくのことを、人を弄ることが好きな意地悪女とも思っているのかい？ それは誤解だよ。ぼくは何も本心で悪口を言っている訳じゃない。口が勝手に動いてしまふんだ。口が動けば動くほど、その人に対する信頼度が厚いということだよ。素直に喜びたまえ」

そんなの無理だから！

「素直に人の好意が受け取れないのかい？ そんなだから、さやかに見限られたのだよ。少し折檻が必要だな」

少女は突然足を止めると、猛烈な速さでくるくると回り始めた。

僕は悲鳴を上げる。やめる、目が回る！

「ぼくをちゃんと見たまえ」

僕は薄目を開けて少女を見つめた。

背後の景色が絵の具をかき混ぜたように歪んで、少女の顔だけがはっきりと見える。

少女は慈しむような優しい表情を浮べて、言った。

「これでも、僕は君のことを歓迎しているのだよ。……ここは、万人の願いを叶える楽園だ。望む事すべてが手に入る。望めよさらば与えられん、だ。君はもうすでにばら色の人生を送る切符を手に行っているのだよ」

僕はこう答えるしかなかった。

「僕はもう死んだんだ。何故この世界に来てしまったのかはわからないけれど、人生をやり直せるなんてことは絶対にない」

「死んだ後の時間が人生でないと誰が決め付けたんだい？ 君はこの楽園で、ひたすら楽しい時間だけを享受する権利を手に行っているのだよ？ 何をためらうことがある」

僕はさすがのような視線を少女に向ける。

「本当に何でも手に入るの？」

「やっと良い質問をしたね。その通りだ。ここでは何でも手に入る。自分が望む世界に、世界は自ずと変わってくれる。ある意味、今のぼくと君の関係も、君が望んだものなのだよ」

「あのさ……いつまで回っているの？」

僕が言った瞬間、突然少女が手を離れた。僕の体は吹っ飛ぶ。何するんだ、このアマは！

派手に転び、しばらく僕は起き上がれなかった。僕達を見て笑っている周囲の人々の顔が、斜めに傾いて見える。

「まったく。君が長話を強要するものだから、ぼくまでこんな目に遭ってしまったじゃないか。そこ、ぼくを笑いものにするな！」

少女は、額を押さえながら、苦しそうに喘いでいる。僕はやっとのことで酔いが覚めると、「大丈夫？」と少女に手を差し出した。

「まったく、君という奴は、酔いが早く覚めたからといって、ぼくを見下しているのかい。それとも、ぼくのあられもない姿を見て、性的興奮を覚えているのかい？」

「変態かよ、僕は！」

少女は弱弱しく僕の手を握ると、言う。

「ぼくを、あそこまで連れて行ってくれ」

少女は、ベンチを顎でしゃくって示す。はいはい。

ベンチに座って一息吐くと、少女が口を開いた。

「さきほどの話の続きだ。君はこの世界で何を望む？ なんでもいい。欲しい物や行きたい場所はないのかい？」

「本当に何でも良いの？」

「……ああ。何でも構わない」

少女の、宝石のように艶やかでまっすぐな瞳から僕は視線を逸らし、彼女の胸元を見た。

背がちっさい癖に結構ボリュームあるよなあ……。

突然拳が迫ってきて、僕は顔面をぶん殴られる。

「き、君は、なんて妄想をしているんだいっ。よりもよって、このぼくに欲情するなんてっ」

見透かされていたのか。

「あまり強く願わないでくれたまえよ。現実になってしまっから」  
少女は半泣きの状態で、自身の体をかばうようにぎゅっと抱きしめた。不覚にも、そんな仕草が可愛いと思ってしまう。

「わかってるよ。冗談だって」

僕はバリカンを押し付けられたようにひりひり痛む頬をさすりながら言う。

「まったく、これだからオスというものは……」

少女がぶつぶつぶやいていると、こちらに近寄ってくる人影を見つけた。

ひよろつとした、もやしみたいな男だった。金髪で、耳にピアスをしている。なにより、ドン引きしてしまうのは、エロ本を眺める中年男みたいな、だらしなく緩んだその顔だ。

「やあやあ、お二人さん。これからホテルでも行くの？ 生はだめだよ。未成年なんだからね」

男は、ヒラメみたいな顔でへらへら笑いながら、言う。こいつ、本当に見かけ通りの奴だな。

「おや、ミリル。三日ばかり姿を見せないからてっきり死んだのかと思っていたのだがね。こうして無事に君の顔を見られて、少し残念だ。いや、かなり残念だ。てか、死ぬ」

少女の毒舌がさらにパワーアップしてる！？ 何者なんだ、この人は！

「おいおい、つれねえなあ。一緒の布団で寝た仲だろ？」

すると、少女の腕が掻き消えた。唸り声が聞こえた気もした。少女がものすごい速さで腕を振ったのだ。僕が振り向いた時には、すでにミリルは吹っ飛ばされている。

ミリルは起き上がって、唇の血を拭いながら戻ってきた。

「いやあ、お前の拳はやっぱり見えねえよ。おっぱいがぶるんと震

えたのはばつちり見たけどよ」

「二人つてそういう仲なの？」

僕が言つと、少女は何故か、恋人に必死に何かを頼み込むような、懇願の目を向けてきて、「違う！」と叫んだ。

「なんで、ぼくがこんな男とまぐわなければならぬんだ。君のドタマには本当に呆れてしまふよ！」

「違わないぜ？ 確かに俺はこの手でお前のあそこを触りながら抱きすくめたけどな」

な、何を言ってるんだこの人は！

少女の顔は湯気が出そうなほど真っ赤になり、

「ば。馬鹿かね、君は！ 何を勘違いしているんだい！」

何故か僕の頭をばか叩いてきた。どうして僕を殴るんだよ！

「まあ、俺がこいつを抱いたのは、赤ん坊の時だけだね」

やっぱ、そういうオチですか。

「全くオスというものは甚だけしからん！」

少女は目に涙を溜めながら、ぱたぱた悔しそうに膝を叩いている。

「で、こいつが新入りか？」

ミリルは僕を顎でしゃくって示した。

「そつだ。数時間前にこの世界に迷いこんだ魂だ。いまだにこの世界の仕組みを理解していない馬鹿者だよ」

ミリルは、突然僕の顎を掴み、持ち上げた。顔を近づけてくる、な、何するんだ！？

「お前みたいないなひよつ子が、よくこの世界に来れたもんだな。歓迎してやるよ。名前は？」

「ナルミ」

答えたのは、少女だった。僕は驚いて振り向こうとするが、顎を固定されたままなので、うまくいかない。ていうか、いい加減、気持ち悪いから、やめてくれ！

「ナルミね。覚えとく」

ミリルは顎から手を離れた。一瞬、ミリルの目が鋭くなった気が



する。え、何？ 僕、何か怒らせるようなことした？

「じゃあ、俺は酒場にいるから、後で来いよ。くれぐれも生はやめとけ。コンドーム持つてるから貸して……ぐぼあぼびっ！」

少女に殴られたミリルは、顔中を腫れ物だらけにしなから、「ひやあな」と手を振ってその場を後にした。

少女はすぐにミリルから興味を失ったように視線を外し、僕へと振り返った。

「それで、願いは決まったかい？」

「うん。決まった」

僕はまっすぐ少女を見据える。少女の頬に赤みが差した。

「まさか、まだ僕に不埒な事をさせる気じゃないだろうね？」

「本が読みたい」

僕は、長年心にしこりとなって残っていた、本心からの願いを吐露した。

「傑作と言える本を読んで、感動してみたい」

少女は、深くうなずく。

「わかった。この世界はなんなりと君の望みを叶えるだろう。こっちに来たまえ」

少女は僕の手を引いて歩き出す。少女の手は、相変わらず毛布にくるまったように暖かだった。

「一体どこに行くの？」

「君の望むものが置いてある場所へ行くのだよ。たった今、それはこの世界に姿を現した。君が願ったからだ」

にわかには信じ難かったけれど、少女のまっすぐな瞳を前にして、何もかも信じてしまいそうだった。

## 1 (後書き)

短い話なので次が最後です。どうか最後までお付き合い下さい。

## 2 (前書き)

ページを開いていただきありがとうございます！  
すこしでも楽しんでいただけたら幸いです！

僕は、小さな本屋の前にいた。壁紙のはげかかった壁、錆び付いた看板、薄汚れた窓。何年もの歳月をかけて風化したような、随分と年季がかった店だった。

「君の願望の結晶だよ」

少女は店を見つめながら静かに笑う。店は、狭い路地裏を進んだところにあつた。何故か焦げ臭い匂いが漂い、水溜りがあちこちにある。

「君が願うことで、この店は突如として出現した。世界は最初からそれがそこにあつたように、万人の認識を変えたんだ」

僕はうなずいたけれど、まだ信じきれていなかった。だって、普通に考えたつて、そんな都合なこと、起きるはずがない。

「君の疑いの気持ちはごもつともだ。存分に疑うがいい。けれど、すぐにそんなことは些細な問題になる。近いうちにわかるさ」

そう言つて、少女は僕の腕を引いて、店内に入った。カウンターは無人だった。中には棚が所狭しと並んでいて、そこかしこに真新しい本が詰まっている。僕の目には、まるで美女が腕を広げて待っているかのように見えた。僕は歓声を上げて、本に飛びつく。

「すごつ、なんでこんなに新刊が揃つてるの？ これ、全部読んで良いのか？」

「好きにしたまえ」

少女はカウンターの椅子に腰掛ける。

本棚にはベストセラー小説のほか、見たことのないようなレーベルの本が並べられていた。

一冊手に取つてみる。真っ白な装丁の本だった。題名は「願い」。作者の名前はどこにも書かれていない。

少女の方へ振り向くと、彼女は僕の心の内を見透かしたように言う。

「ここには、世界のありとあらゆる本が集められているんだ。君の願いによって新しく創造された本もある。好きなだけ読み、そして感動したまえ」

僕はうなずき、本を開いた。

最初の一文字を読んだ瞬間、文字の羅列に体を呑み込まれ、僕はあつという間に物語の中に没頭した。

僕が本を胸に抱きしめたまま、泣いていると、ふと少女が近寄ってきた。僕はみっともなく泣き顔を晒しながら、それを少女に差し出す。

「すごく、すごく感動したよ。こんな傑作、読んだことない」

「だから言っただろう？ この世界では望むと全てが叶うんだ。疑いはもう捨てることだね」

少女は、本を受け取って、棚に戻す。それから僕に向き直って、手を持ち上げた。

その手はゆっくりと僕の目の前を通り過ぎていき、ぼふんと頭の上に置かれた。優しく撫でてくる。

「泣き止みたまえ。さらなる感動が、この世界では味わえるのだから。ぼくと共に生きよう、ナルミ」

少女の手つきは、壊れ物を扱うように優しくかった。僕が目からさらに涙が溢れそうになる。

「ナルミ、君がこの世界にいるのも、ぼくが願ったからだよ。ぼくの願いが君とぼくを引き合わせた。ぼくは君に会いたかったんだ、ナルミ」

少女の目は長年会えなかった想い人を見るように優しくかった。

「君の涙も、疑いも、哀しみも、喜びも、すべてぼくのものだ。ぼくは君と共に生きることが誓おう。いつまでも一緒だ」

これって、プロポーズ？

「そう受け取ってくれても構わない。言っただろう、ぼくは君を歓迎しているよ」

僕は目を拭って、少女に向き直った。

「ありがとう。嬉しいよ！」

僕が微笑むと、少女の頬にわずかに朱が差す。

「ぼ、ぼくは自分の本心を言ったまでだ。感謝される謂れはない」  
素直じゃない奴だな。

少女は僕から顔を背け、フードを目深にかぶった。再び前に向き直った時には、石灰岩のような無表情に戻っていた。

「ミリルが酒場で待っている。行こう」

路地裏から出て、様々な店が軒を連ねる商店街の下り道を、歩いていくと、ほどなくしてあの森に着いた。ランプの光を頼りに進んでいく。木造の建物が見える。

「あれがそうなの？」

僕の言葉に、少女はどこか嬉しそうな顔でうなづく。

酒場に行くっていつても、そういえば、こいつ未成年じゃなかったのか？

「未成年が酒を飲んでいけないのは、ぼくたちが生きていた頃の話だ。この世界では何もかもが自由なのさ」

建物にはテラスがあり、そこで酔っ払いが騒いでいた。ジョッキのビールをぶっかけあたりしている。まるでスラム街の少年だ。あまりお近づきになりたくない。

僕らが酒場のドアに手をかけると、酔っ払い達が振り向き、少女を見て「姐さん久しぶり！」と声をかけてきた。え、意味わかんない。姐さん？

「やあ、元気にしていたかい？」

少女は軽く手を挙げて答える。僕は啞然として少女と酔っ払いを見比べていたけれど、彼女に腕を引っ張られて店の中に入る。

店内にはラーメン屋の台所のようなこんもりとした生温い空気が漂っていた。テーブルはどの席も満員で、賑やかな雰囲気におおされて立ちつくしていると、店の奥から「おい、ナルミ！」と声がか

かった。

見たら、ミリルが手を振っている。

「来たまえ、ナルミ」

少女が僕の手を引いて奥へと進む。

ミリルは両手にジヨッキを持って、かわるがわるに飲み干しながら、「座れ、この野郎」と椅子を蹴って差し出してくる。なんて無作法な奴だ！

僕は少女と向かい合う形で席につく。隣に座るミリルの口から、へドロのような酒臭い息が漏れてきて、なんだかもう既に店を出たくなってきた。

「遅かったじゃねえか。ちゃんとコンドームはつけたか？」

「君という奴はまた何を言っているんだ。さっさとぼく達の方も頼みたまえ」

「へいへい。生ビール二つ！」

うわっ、唾がかかった。汚ねえ！

「どうだい、ナルミ。この世界が、喜ばしいものに見えてきたかい？」

少女が身を乗り出して聞いてくる。

「悪い場所でないってことはわかったよ。でも……」

僕は罪悪感を感じながらもその言葉を口にした。

「僕はこの世界はどうしても好きになれない」

すると、少女が目を伏せる。

「てめえ！」

ミリルがジヨッキをテーブルに叩きつけた。生温い液体が、岩礁にぶつかる波のように弾け飛ぶ。

「てめえ、やっぱりその気だったな？ こいつがどんな気持ちでお前を迎え入れたと思ってるんだ、アア？」

ミリルは突然僕の胸倉を掴んだ。僕は喉を押さえて、身をよじらせる。すごい腕力だ。

「お前の願望がこの世界を破壊することを知ってて、言っているの

か？ お前みたいな奴は今までいなかっただのに！」

「やめたまえ、ミリル。彼の話聞いてみよう」

少女が言うと、ミリルは舌打ちをついて、僕から手を離す。

「ナルミ、君はどうしてそう思うんだい？」

少女は重い告白を聞くようにじっと僕の目を見つめてそう聞いてくる。

どうしてそう思うのか。自分に問いかける。

この世界にいる間ずっと、もやもやした感覚が胸の中にわだかまっていた。

まるで、まったく違うパズルのピースを無理矢理詰め込むような、強引さがこの世界から感じられた。

こんなの間違ってると思う。

人々はこの便利な世界を崇拜した結果、願いが叶うことが当たり前になっってしまうのだ。

そんなの不自然すぎる。

「人には必ず帰らなくちゃいけない場所があるんだ」

僕が言うと、ミリルがテーブルに拳を叩きつけた。

「どこの宗教者だよ、お前！」

「ミリルは黙ってくれたまえ！」

少女が顔を向けずに言った。ミリルは「へいへい！」とぶっきらぼうに言う。

「この世界は、結局現実のまがいものでしかない。ここでは、生きるとは言わないよ。死者は本来還る場所へと行かなきゃいけない。それが理なんだ」

自分でも何を言っているかわからない。けど、どんな言葉を吐いても、この世界には断じて賛成できない。

「すると、君は、ぼくたちが理に反したことをしていると言いたいのかい？ ぼくらは本来この世界にはいけないんだとそう言いたいのかい？」

「そういうことに……なる、かな」



「そうか……君は現実主義者だね。感情よりも頭が先に動く」

少女は俯いてしまった。その瞳は哀しみに歪んでいて、原因が僕であることを思うと、胸が締め付けられる。

「おい、ナルミ。こいつの過去を知って、まだそんなことが言っていられるのか、お前は」

ミリルが突然そう言った。

「やめたまえ、ミリル」

しかし、ミリルは少女に振り向かず、言葉を続ける、

「こいつは現世でどれほどの時間を生きたと思う？ 驚くな、なんと二十三秒だ。こいつは生まれてすぐに命を落としたんだ」

僕は息を呑んだ。少女を見ると、彼女は居心地悪そうにそっぽを向いてしまう。

「こいつはこの世界に来て、初めて言葉を理解し、人々と接し、地に足をつけることを学んだんだ。こいつにとって、この世界こそが現実なんだよ」

そんなことがあったなんて。僕は少女の境遇も知らず、ただ自分の主張だけ押し通そうとしていたのか。

僕の胸に、分銅が詰め込まれたような重苦しい迷いが生まれる。

僕は、どうすればいい？

「ぼくは何も、他人に同情されようとは思ってないよ。そんなのは不愉快だからね。けれど、ぼくがこの世界を愛していることは確かだ。この世界はぼくにとって母親であり、父親であり、神様なのだから」

少女は顔を上げて、恋人の言葉をじっと待つように僕を見つめた。

ぼくは少女と目が合わせられずに、俯いてしまう。

どうしたらいいんだ？ このままだと少女の居場所が消えてしまう。けれど、それでも、僕は。

「君の決意は揺らがないのだろうか？ この世界を壊し、本来行くべき場所へと向かうというその思想は」

ぼくは顔を上げ、ちらりと少女の顔を見て、再び視線を足元に落

とした後、かすかにうなづく。

僕には、この世界の法則が耐えられない。たとえば、少女の心のヴェールを剥ぎ取ってしまったのだとしても。

「なら、ぼくは何も言わない。君の願望を果たしたまえ。この世界は、最後まで、願望の具現化を忠実に果たすだろう」

ミリルが言う。

「いいのかよ、それで。お前、今度こそ死ぬんだぞ？」

「構わない。ぼくにはナルミがいる」

そこで、少女はちらりと僕を見て、彼岸花のように儚げに微笑んだ。

「いつまでも一緒だとそう言っただろう、ナルミ？」

僕はもう一度深く、深くうなずいた。

少女がジョッキを手に取り、宙へと掲げる。

「では、乾杯といこうか。この世界で飲む、最後の酒だ」

僕達はジョッキを掲げ持ち、互いに打ち鳴らして、一気に飲み干した。ビールはとんでもなく苦く、それでいて喉をかきむしるほどに冷たかった。僕が初めて飲んだお酒だった。

そして、僕は願った。

この世界を終わりにしよう、と。

\*

「これから、ぼく達はどこへ行くのだろうか」

傍らに浮かぶ光の玉が、声を発した。

「わからない。けれど、これが本来あるべき姿なんだ。これで、良かったんだよ」

僕はそう返した後で、視線を周囲へ振り向ける。たくさんの光の玉が、横を通り過ぎていく。それらが向かう先は、頭上はるか高くであり、光の玉の行列は天の川のように輝いていた。

「おい、お前ら。俺は先に行って待ってるぜ。あつちで会えること

を願っている」

一つの光の玉が近づいてきてそう言い、返事を聞こうともせず、目の前を通り過ぎていく。

「ぼくらも、行こう、ナルミ」

光の玉が寄り添ってきて、そう囁く。

「うん」

ぼくは意識を前方に向ける。すると、ゆっくりと自分の体は光の玉は動き始めた。

光の川は、絶えることのない光を周囲へ散りばめ、ぼくらを乗せて流れていく。本来向かうべき場所へと、ぼくらを導いて。

「さて、君は、向こうでどんな花嫁衣装をぼくに着せてくれるんだい？」

光の玉が言って、左右に揺れ動く。

## 2 (後書き)

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました！  
感想、評価を下されると執筆の励みになります。お時間がありましたら協力してくださるとありがたいです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8825m/>

---

魂は本来還るべき場所へと去る

2011年11月15日20時56分発行